



## 「学ぶ」とは何か？ いったいなぜ、学び続けるのか？

立教大学セカンドステージ大学兼任講師  
(7期専科ゼミ、日米比較講義、担当)  
立教大学名誉教授  
フェリス女学院大学教授

渡辺信二 (アメリカ文学、日米比較、創作)

皆さんは、何を学ぼうとして、RSSCに入ったのでしょうか。また、学んでいる間はいかがでしたか。そして、その目標は達成されたのでしょうか。

RSSC修了後、おそらくは学びの成果を生かして、社会のいろいろな場面で活躍されていることでしょうし、また、今でもなお、学び続けている方がいらっしゃるの、このホームページに載っている読書会や研究会のお知らせや報告から、容易に推測できます。でも、何故、学び、さらに、学び続けているのでしょうか。

### 「学びの情熱尽きることなく」

これは、言うまでもなく、わがRSSCの標語であり、目標であり、また、教員や受講生たち全員が共有する基本的な姿勢でもあります。そして、RSSC修了後も、なお学び続けることを勧める言葉でもあります。「お金はあの世に持って行けない」という台詞は、そんなに欲張るな、とお金への執着を戒める意味がありますが、では、知識もあの世に持って行けないのに、なぜ、知的情熱は、高く評価されるのでしょうか。

何らかの新しい事柄や知識を身に付けるようとする営み、それが「学び」だとすれば、万国共通のように思えますが、実は日本は、個人を大切にする西欧とは、「学び」への基本姿勢が違います。

ご存知のように、日本語で「学ぶ」とは、「まねぶ」であり、「真似る」ことだというのが定説になっています【註1参照】。同義語に、「習う」という言葉もありますが、「学ぶ」と合わせて、「学習」という言葉で使われます。この「習う」というのも、「倣う」であり、やはり、「真似る」に通じます。

基本的に、日本の「学び」ないし「学習」は、手本があってそれをまずは真似るという、あの習字でよく行われる方法が伝統的なのでしょう。読み書きそろばん的な学習は、「真似」をし「反復」し「慣れる」のがいちばん効果的だと信じられているのかもしれませんが。

そして、この伝統は、考えてみれば、日本では、学校教育だけでなく、ありとあらゆる学びの場に浸透しています。

基本的に、師匠が模範的な「型」を示して、それを弟子たちがまずは「真似る」ことに、とりわけ、力が注がれます。例をあげる必要もないでしょうが、茶道や華道、柔道、剣道など、「道」のつく「学び」を考えるだけでも、納得がゆくでしょう。日本の学習現場では、個人やその違

いを無視するというよりは、個人があることを認めていないのかもしれませんが。そして、「学習」に対応する言葉は、「教育」＝「教える」です。外から、上から、師匠から、知識や技能を生徒たちに示して身につけさせることです。

個人意識の強弱や、個人尊重の違いは、おおいに、教育観に反映されます。

個人が個人として認識されているか否かを測る大きな指標の一つは、その人が姓名を持っているかどうかです。例えば、ヨーロッパで苗字のない人々が大量にいた時代は、中世でした。約500年前に、ヴィンチ村のレオナルドが活躍したルネッサンスの頃が中世の終わりだと考えています【註2参照】。

あるいは、今から160年位前の日米を対照すると、ちょっと興味深い事実が浮かび上がります。アメリカには当時、制度としての黒人奴隷がいましたが、苗字のある黒人は、自由黒人以外いませんでした。ほとんどの黒人が、個人としての権利を剥奪されていたのです。白人にはすべからず姓名がありましたが、黒人が苗字を獲得したのは、南北戦争が終わってからです。そして、今なお実質的な差別が解消されていないと指摘されています。

では、翻って、日本では、南北戦争の行われた江戸時代末期、苗字を持っていた人は、日本で何パーセントくらいでしょうか。日本の150年くらい前は、土地に縛られて、〇〇村の誰々としか認識されない人たち、つまりは、苗字のない人たちがほとんどでした。さて、苗字のなかった人たちは、今、日本で個人として尊重されているのでしょうか。

以上の指摘を踏まえた上で、英語の”learn”とはどういう意味なのか、英語の”education”とはどういう意味なのかを考えてみましょう。

まず、英語の”learn”は、単なる教育だけでなく、経験や自己探求によって知識や技術を身につけることです。日本語の「学ぶ」と似ているのは、語源に「先人の足跡を辿る」という意味があることですが、さらに”learn”の語源には、読む、考える、問うという意味が含まれています。そして、驚くのは、19世紀前半までは、”teach”の意味もあったこと（“Dictionary”）。

つまり、”learn”とは、先人の足跡を辿る面もあるが、基本的にじぶんで問いを立て考え自ら学ぶ、ないし、自らに教える、他者にも教えるような行為なのです。決して、「教育」だけに頼らず、自己発見、自己涵養の意味合いが強い。

そして、“education”とは「教育」ではありません。“education”の動詞形である“educate”とは、上や外から「知識」を教えて育てるという意味は全くなくて、むしろ、「潜在的なもの、内在するものを外に引き出す」という意味です。強いて言えば、日本語の「涵養」に近いでしょうか。

こうした教育観は、歴史を遡れば、ソクラテスの「産婆学」にまで通じる西欧の伝統的な学習観、教育観です。「産婆学」とは、自覚せずに内包している「知」を外在化させる行為を言います。たとえば、数学がわからないと思い込んでいる若い牧童が、ソクラテスからの質問を手掛かりに、ついには、三平方の定理を理解するに至る過程を言います。この考え方の背後には、個々の人間は普遍的特性を持って生まれているという信念、個人の差異を尊重する哲学、を見て取れます。

果たして、日本的な「学び」や「教育」と、西欧的な “learn” や “education” と、どちらがよいのでしょうか。

それぞれに利点・欠点があるかもしれませんが、ある段階でどちらが効果的かなど、答えが変わるでしょうから、この問いには、にわかには答えることができません。おそらく、正解は、中庸ないしバランスにあるのかもしれません。ただし、個人の尊重、自由への敬意は、共に無くってはならない最優先の条件です。

さて、では、RSSCの学びは、一体、どういうものだったのでしょうか。個々の違いや、経験の差があるので、「ゼミ」という言葉を手掛かりに一般論として考えてみます。

RSSCの「学び」の中心は、修了論文執筆を目指すゼミですが、この「ゼミ＝“seminar”」という言葉に、実は、あまり意識されていない重要な概念が隠されています。そもそも、“seminar”を「演習」と混同している大学も多いのですが、“seminar”は「演習」ではありません。「演習」とは、慣れるために繰り返し習うことであり、実戦や非常時を想定して行う訓練ですから、根本的に考え方が違います。軍隊用語でもあります。基本的に、日本の伝統である「学び」でしょう。これに反して、“seminar”には、「苗床」という意味があります。植物を安定して育てるために種から苗になるまで育てる場所です。そして“culture”や“cultivate”には、耕す、という意味がありました。すなわち、個々の種を植えて苗に育てる、文化的、知的にそれぞれが育つのを促す場、という意味です。じぶんの経験を振り返るなら、そういう実感は無かったという方がいらっしゃるかもしれませんが、でも、それぞれが探求したい問題意識や主題は、完璧に尊重されたのではないのでしょうか。そして、教員はそれぞれの課題を尊重した上で様々なアドバイスをを行い、周りの仲間は、相互研鑽、相互教育の精神でゼミに臨んでいたはずで

江戸時代末期の儒学者佐藤一斎（1772-1859）に、「少（わか）くして学べば、則（すなわ）ち壯にして為なすこと有り。壯にして学べば、則ち老いて衰えず。老いて学べば、則ち死して朽ちず」（「佐藤一斎・言志四録 紹介」）という言葉があります。RSSC受講生への励ましの言葉として、ときおり、入学式などで引用されますので、聞いたことのある方もいると思います。ただ、特にRSSC受講生に向けたと思われる「老いて学べば、則ち死して朽ちず」の解釈が難しい。儒教はもともと、この世のための政治哲学ですから、「死して朽ちず」を「死んだ後も名声が残る」と解釈されることが多いのですが、「名声」が残るのはほんの一握りの方ですから、我々のほとんど多くは当てはまりません。むしろ、ここでは、「老いて学べば、学んで身につく知識教養だけでなく、その学ぼうとする意欲そのものが、老化を防いでくれるので、死ぬに際しても、判断や精神が腐ってくずれたりぼろぼろになっていたたりすることはない」という意味で取りましょう。

もちろん、お金儲けに生きるのも人間的な生き方ですので、否定はできませんが、でも、学ぶことの方が、より高貴で真摯な人間の生き方です。「死して朽ちず」です。聖書から言えば、「人はパンのみにて生きるにあらず」でしょう。

学びとは、何か成果を求めたり、代償を欲するようなものではありません。知的探求は、それ自体が喜びであるようなものです。何かを求める学びは、何かを切り落とします。それは、「想定外」を容認する学びとなります。むしろ、真の学びとは、学びそのものが、持続して生きていることの証となるような生活態度です。問い続け、考え続ける姿勢です。

学ぶとは、畢竟、真摯に生きることです。

今後とも、相互研鑽の関係を維持されつつ、学び続けられることを願っています。

---

【註1】

なお、「日本語の諸問題（26）」によれば、「学ぶ」と「まねぶ」の語源が同根だという国語学の常識は、俗説だという。

この主張によれば、「まなぶ」の「ま」は、「まこと（誠）」「まなつ（夏）」の「ま」であり、「なぶ」とは、古語の「な（並）む」「な（並）ぶ」である。この用例は『古事記』や『万葉集』にすでにある。しかし、「まね（真似）ぶ」は、名詞「まね」に接尾語「ぶ」がついた「まね・ぶ」であると主張する。

ただ、この主張は、「まね（真似）」の語源は、「ま・ね」とし、「ま」の「ま」は、「学ぶ」と同じく、「ま・こと（誠）」「ま・なつ（夏）」の「ま」であり、「ね」は、「に（似）」ではないかと説明するに至って、次第に、語源同根説の否定であるのか、心許なくなる。

また、語源問題は別にして、意味を考えるなら、この主張は、「学ぶ」の意味を「師匠や先達に教えを乞い、その水準に並ぶように努力すること」とするので、やはり、「学ぶ」と「真似る」をほぼ同義だと考えることができよう。

【註2】

近代がいつ始まったか、に関して、まだ定説はない。

学者によって、「近代」の定義が異なるので、ルネッサンス、レコンキスタ、宗教改革、産業革命など、様々な議論がある。日本の歴史教科書は、ルネッサンスを近代の始まりと見ることが多いが、ここでは、民主主義や、個人の自由、「万能人」から専門家への変化、という視点を重視して、宗教改革からピューリタン革命の頃に、次第に、中世から近代へと変貌していったと判断する。

【引用・参考文献】

“DICTIONARY,” DICTIONARY.COM. 2016, 3, 5. WEB.

「日本語の諸問題（26）「学ぶ」の語源は「まね（真似）ぶ」か」。2016, 3, 5. WEB.

「佐藤一斎・言志四録 紹介」。2016, 3, 5. WEB.